



蟹江 憲史

かにえ・のりちか 専門は国際関係論、地球システムガバナンス。著書に「SDGs（持続可能な開発目標）」など。52歳。

あるいは、人類と地球の持続的な発展に貢献できるのか、という視点が置いてきぼりになってしまっている。一方で技術系の専門家は、年を重ねるにつれ、社会的事項への関心を持ち始める人が多いように思う。技術の知識を後ろ盾に、社会のあり方を語る。気になるのは、社会科学が万事を解決できる学問だと誤解し、

会における技術の在り方についての見識も深まっていくだろう。私が以前勤めていた東京工業大学では近年、広い視野をいかにして技術者に教育するかとの議論が盛んに行われた。その結果として、哲学や歴史、文学、芸術などの教養を身に付け、人間を自由に解き放つ技を学ぶ「リベラルアーツ教育」の充実を

い視点での議論が重要なのだ。ところで、こうした多面的な視野で議論を行うことの重要性は、迫りくる東京五輪を巡る議論でも同じことが言える。近年の五輪でクロスアップされてきたのは、開催都市や開催国に何を残すことができたのかという「レガシー（遺産）」だ。東京大会のレ

なるだろう。この1カ月、日本各地で自然災害が頻発し、デルタ株という変異ウイルスの広がりや影響が深刻化している。ただ、それは異例ではなく、人間活動を止めてしまっただけの影響を及ぼす災禍は今後も常に起こり得ると思えるべきであろう。だとすれば改めて今、五輪を行う意義とインパクトをしっかりと記録しておくことが、せめてできることである。開催都市を毎回選び、大規模な競技施設を造ることが本当に持続可能なのか。オンラインやデジタル化の進捗と、気候変動の影響の増大が同時に進む今、もっと効率的に準備を進め、ハイブリッドな形態による大会も追求できるはずだ。ここでもやはり、多様な視点からの検証と議論が大事になる。

それを前提に、社会のあり方は「こうあるべきだ」といった理想論に陥りやすい傾向にあることだ。理想を語ることは大事だが、実際には「魔法のつえ」は存在しない。社会の分析も、自然科学と同様に、地道な研究の積み重ねである。技術者が早い段階で、社会科学や社会そのものへの理解を深められれば、社

組織改革とともに具現化している。いわゆる文系の、社会や人文を勉強する人は、技術や自然科学の知識を、理系の人は、社会や人文的な素養を、お互いに早い段階から身に付けていくことが大事だ。そうすることで、本当の意味でのコストや、将来社会を豊かにするエネルギーに関する議論も深みを増すだろう。幅広い

ガシーとは？ 今のところは残念ながら際立ったものは何もないように思う。しかし逆説的に、開催自体がレガシーかもしれないと思っただけがある。これまで観客のない状態での五輪というのは、おそらく歴史上なかった。だとしたら、東京五輪と比較することで、過去や未来の有観客五輪のインパクトが改めて明らかに

なるだろう。この1カ月、日本各地で自然災害が頻発し、デルタ株という変異ウイルスの広がりや影響が深刻化している。ただ、それは異例ではなく、人間活動を止めてしまっただけの影響を及ぼす災禍は今後も常に起こり得ると思えるべきであろう。だとすれば改めて今、五輪を行う意義とインパクトをしっかりと記録しておくことが、せめてできることである。開催都市を毎回選び、大規模な競技施設を造ることが本当に持続可能なのか。オンラインやデジタル化の進捗と、気候変動の影響の増大が同時に進む今、もっと効率的に準備を進め、ハイブリッドな形態による大会も追求できるはずだ。ここでもやはり、多様な視点からの検証と議論が大事になる。

よつやぐである。経済産業省が2030年の電源別発電コストを新たに試算し、公表した。最も安いのは太陽光発電。6年前の試算で最安だった原子力は、安全対策費の増加などでコストが上昇している。とりわけ東日本大震災以降、原発にかかる安全対策のコストをきちんと算入するよう、専門家や市民が声を上げてきた。この10年にかかった膨大なコストを考えれば当然の主張であり、よつやぐ経産省が受け入れた。

原発の業況を見ると、そもそも廃棄物をどう処理するかといった問題を

を含め、課題は多い。未来の社会を構築する議論において、金銭が全てを決めるとは思わないが、正面向からコストと向き合い始めたのは大きな一歩である。そうすることで初めて、本当の意味で望ましい電源構成の議論が可能になるからだ。

技術の開発や発展には、大きな努力が必要で、原子力エネルギーも、その利用に多大な労力を要している。ただ、技術者ほどかく技術の進歩に目を向けがちだ。研究に没頭しすぎると、その技術が社会でどのように使われ、位置付けられるのか、

東京五輪